

■ドビュッシー／交響詩《海》

交響詩《海》は「管弦楽のための3つの交響的素描」という副題をもつ。水面が陽光にきらめき、色彩が移ろっていく海の表情とそこから受ける心象風景を表現した音楽で、楽譜を見ると、ほとんどいつもトレモロやアルペジジョ、すばやいリズムの刻みをいずれかのパートで奏でていることに気づく。大海原のスケールをもちながら刻々と流動していく印象をもたらすのは、この細かい音符の連続に他ならない。そして個々のモチーフもこの反復音型にのせて、次々と別の楽器へと受け渡されて、絶え間なく変化している。

クロード・ドビュッシー(1862-1918)は1905年に作曲された《海》でじっくりと楽器による音色の特徴やその効果と取り組み、色彩を重視したユニークな管弦楽法を駆使した。彼は常に何色かのペンと鉛筆を机に備え付けていて、その時々で色を使い分けながら楽譜を書いたが、《海》のスケッチには最初に書き込まれたモチーフに、あとから赤のペンや青の鉛筆で模倣的な楽句を書き込み、新たな音楽の層を重ねた改訂部分が散見されるという。たとえば第1曲終わりのコラールへの推移部では、弦楽器が波のような音型を反復しているところへ循環主題の断片がホルンで奏でられる。この部分も赤のペンで書き込まれていて、さらにトランペットの短い楽想が青い鉛筆で付加されている。こうした変更の数は、少し前の《牧神の午後への前奏曲》や《夜想曲》のスケッチよりもかなり多い。

さらに論理的構造という点でも熟考されていて、循環主題が楽章の枠を超えて使われ、メロディが紡ぎだされていく。第1曲「海の夜明けから真昼まで」の導入部でイングリッシュ・ホルンとトランペットによって吹かれるのが循環主題。ここでは薄暗い早朝の海がほんのわずかずつ色彩を変え、太陽の光が強くなっていく様子が描かれる。第2曲「波の戯れ」は同じく短い導入部で始まり、そのあとにイングリッシュ・ホルンで提示されるモチーフや、ヴァイオリンで奏でられるモチーフなど、楽想の断片が次々と現れてはうつろう。全音音楽の響きが特徴的。第3曲「風と海の対話」は、それまでとはちがった雰囲気が始まる。第1曲の循環主題のほか、第2曲の主題もときおり姿を見せ、嵐のような激しい音楽へと発展する。ティンパニの一撃によって、曲は閉じられる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。